

禁断

The clown wants to eat immature fruit

テイステイノ

R18



Adult Only
CONTENTS INCLUDE



この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

インターネット上への掲載
(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)、
無断転載・複製・複写・転売は禁止です。
ネットオークション、フリマアプリでの転売はご遠慮ください。

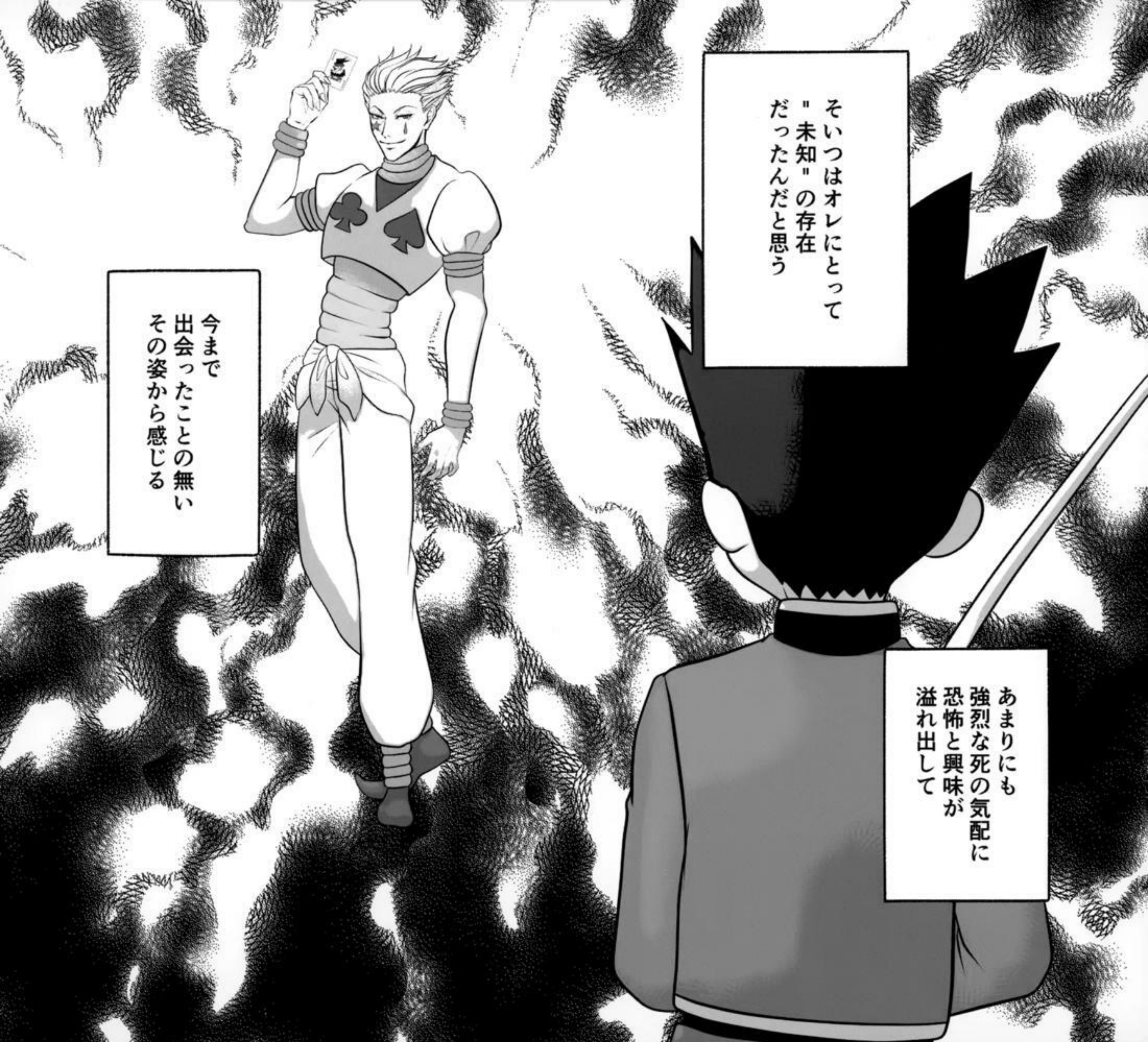
処分する際は同人誌専門の中古書店に売却していただくか、
中身が分からない状態にしていただいた上で
可燃ゴミとして廃棄してください。

この本はR-18です。
18歳未満の方の閲覧は固くお断りいたします。



※同意のない性行為の描写あり※
強姦・暴行行為を推奨するものではありません
現実にあっていいわけが無いので
創作物として楽しめない方はお帰りください

※なんでも許せる人向け※
苦情は受け付けません



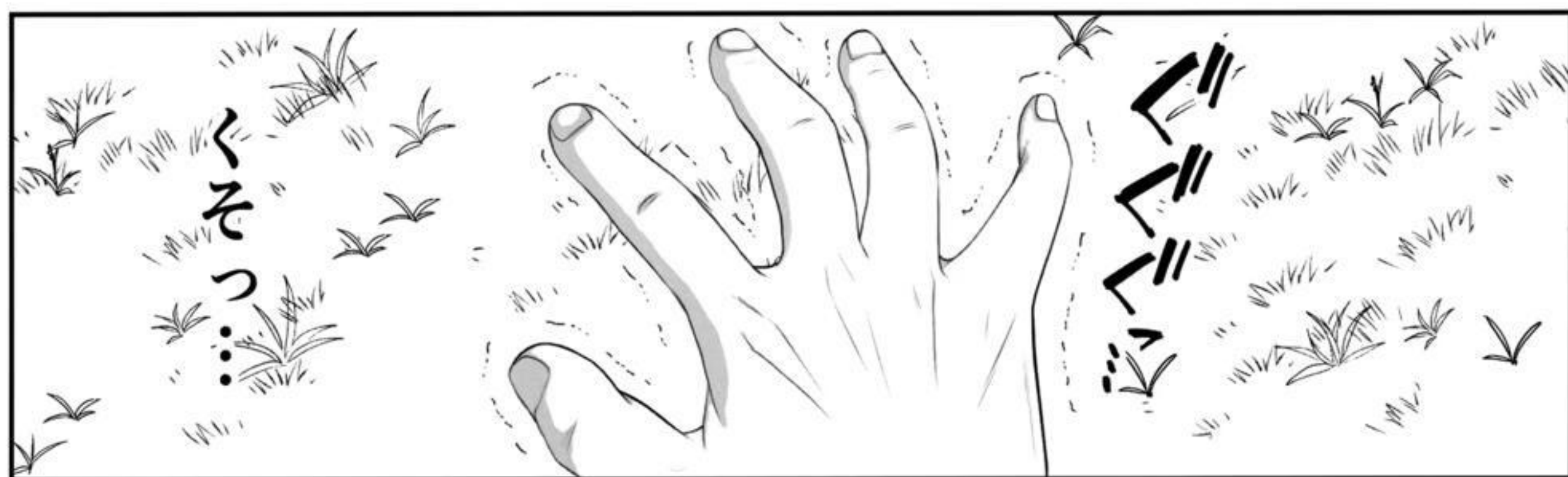
そいつはオレにとって
"未知"の存在
だったんだと思う

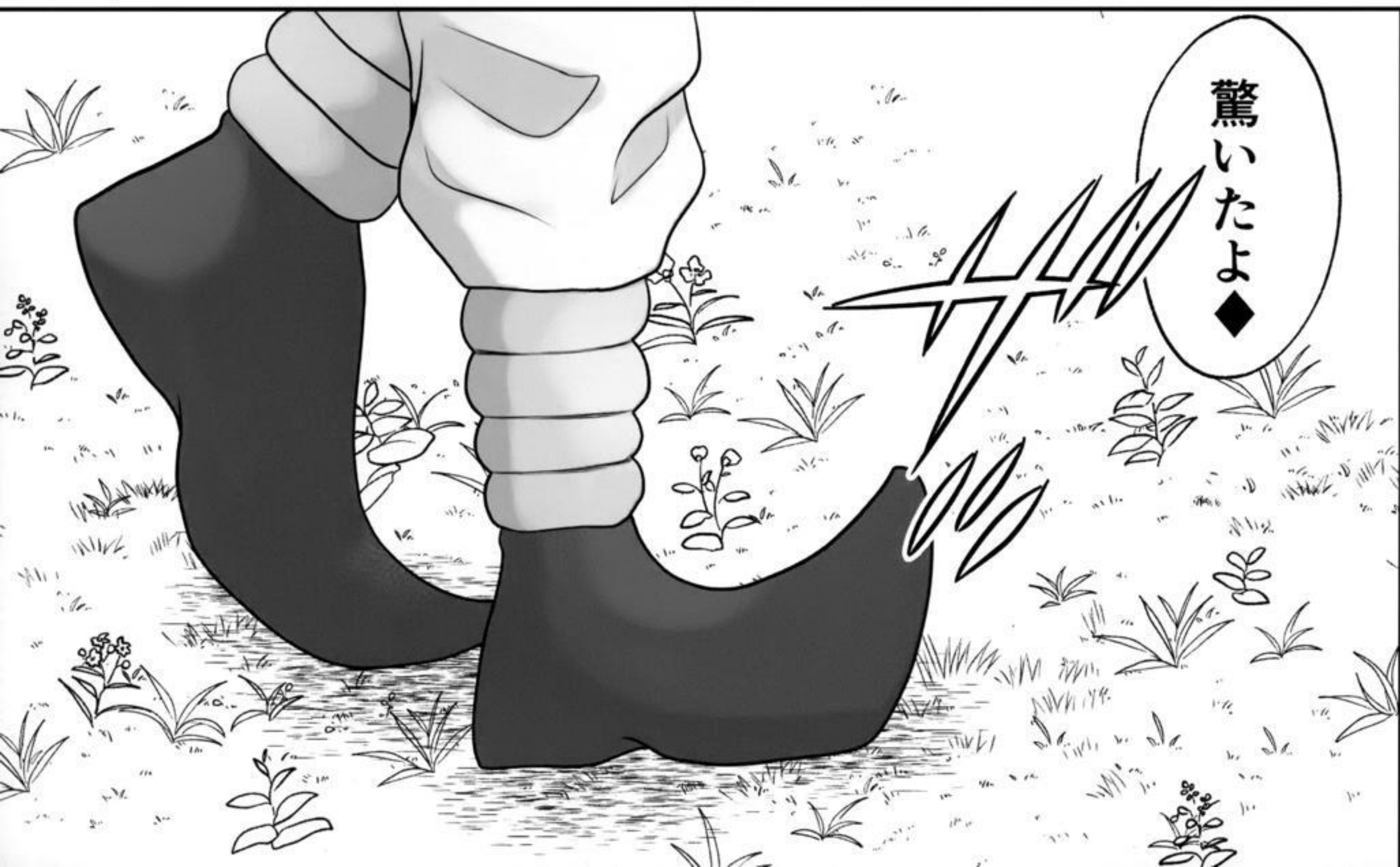
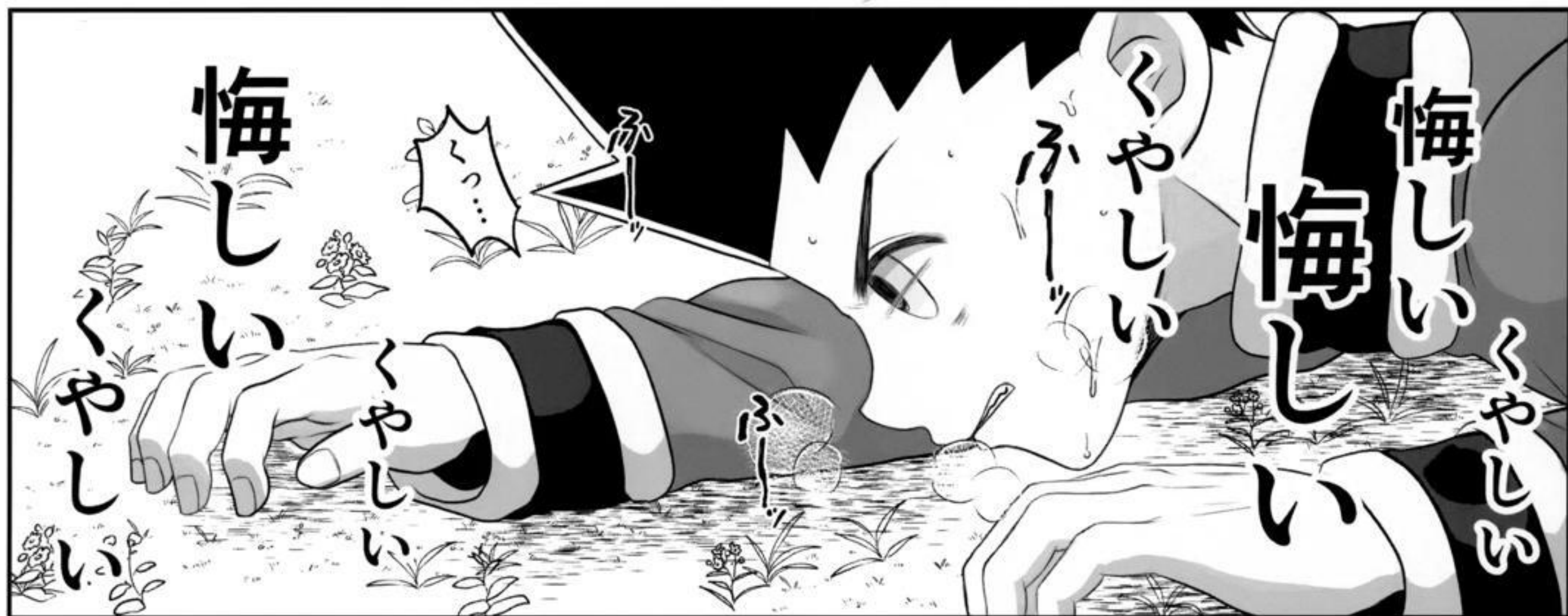
今まで
出会ったことの無い
その姿から感じる

あまりにも
強烈な死の気配に
恐怖と興味が
溢れ出して

目が離せない

次からは
自分の背後にも
気をつけな







ずっと気配を絶って
チャンスがうかがって
いたのかい？

ボクが誰かを
攻撃する
一瞬のスキを？

ヒソカ……！



見事だった♡

嫌だ！

待てよ……

いらないっ！

こんな情けなんて！！

プレートを……

いらないんだ!!!

とり返しに
きたんじゃないのか？



ううん
褒めにきただけ♡

それはもう
いらない♡

そういうなよ♠
それは貸しだ♣

いつか返して
くれればいい♡

筋弛緩薬を
打たれたんだ♠
大人しくしてなよ♣

それじゃあね♦



今返す……!



借りなんて
まっぴらだ……



はあ

見逃してあげよう
と思ったのに♠



殺される

今度こそ

でも

逃げたくないっ



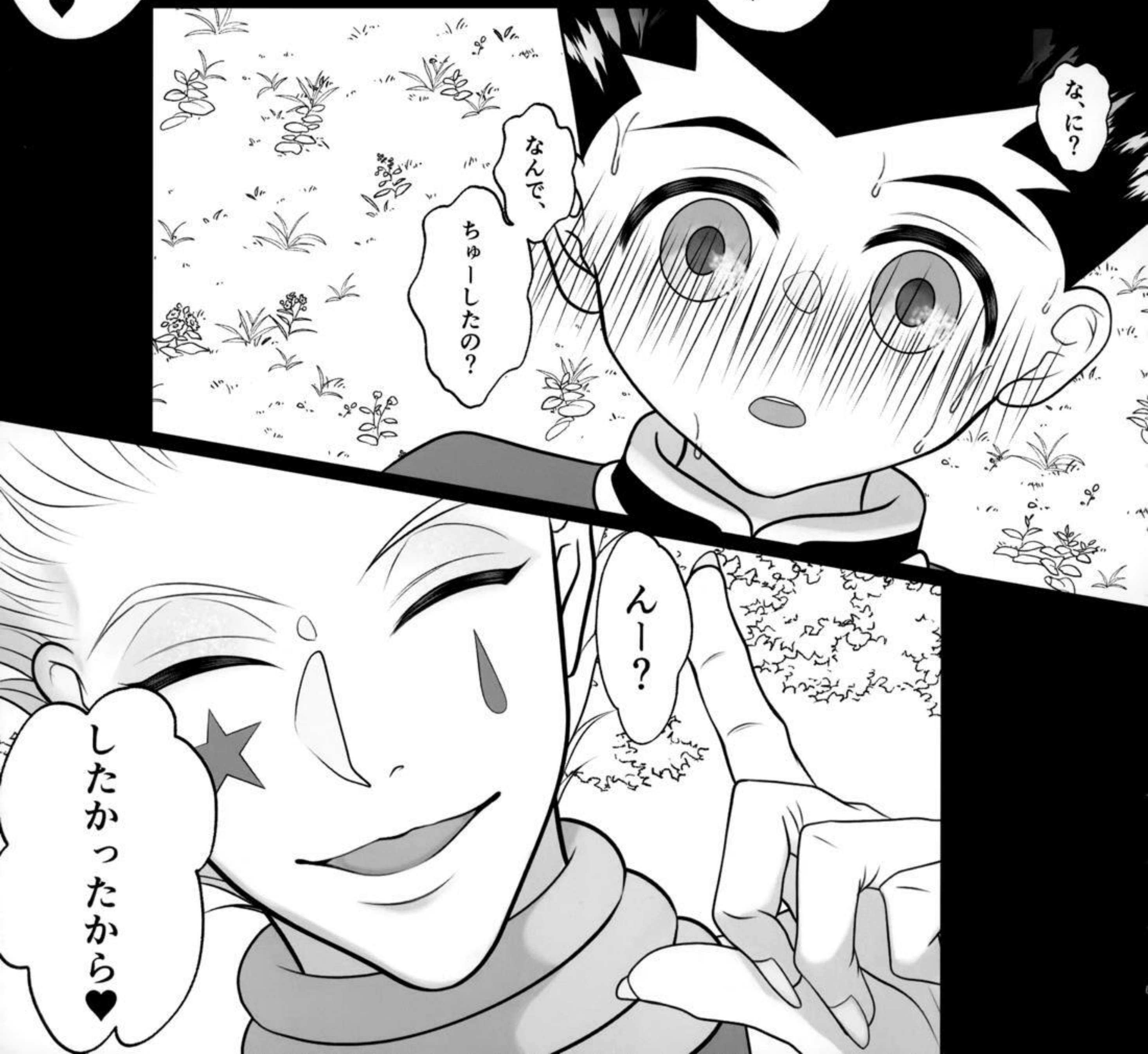
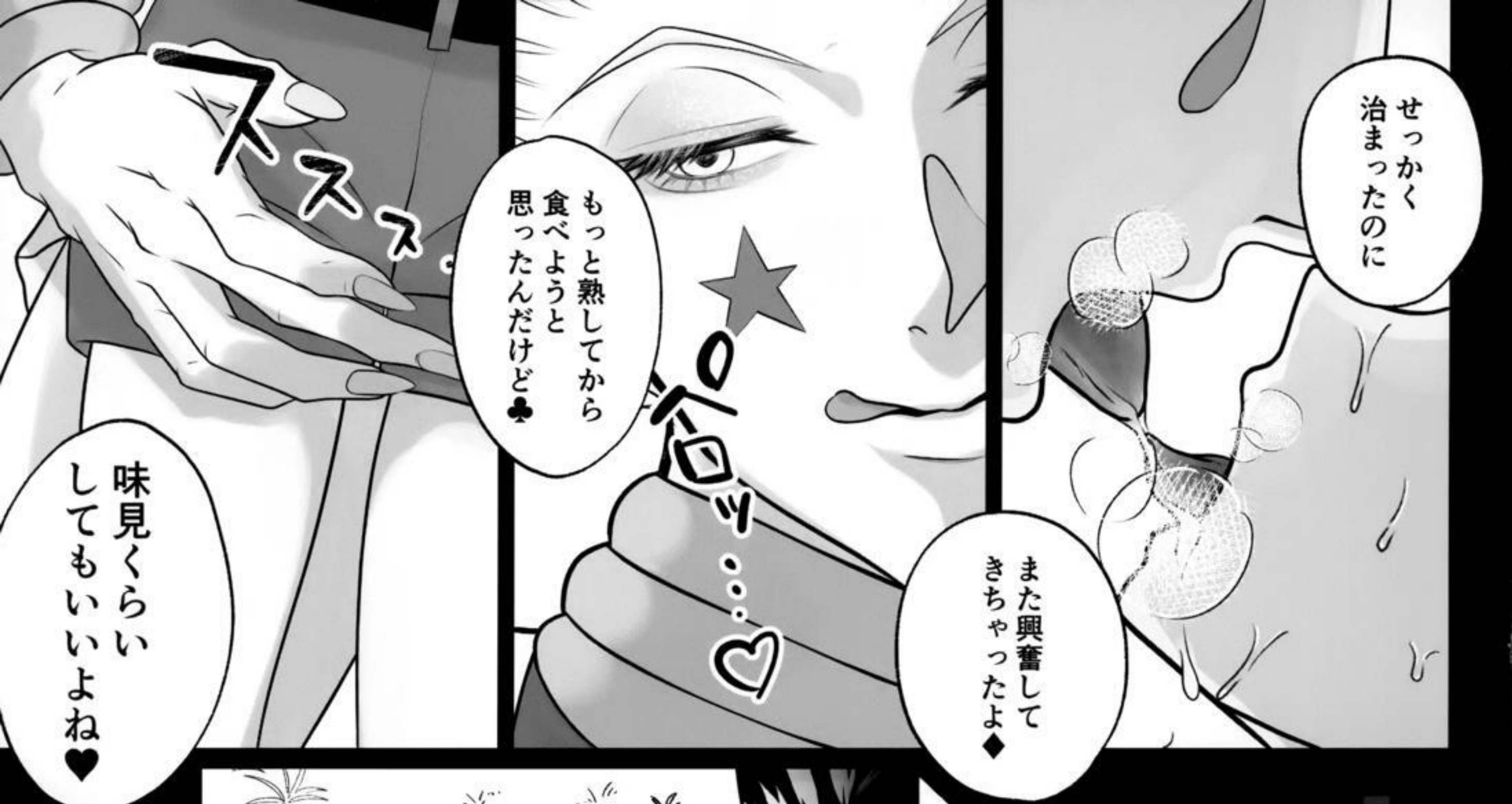
キミは
ホントに
可愛いね♡





ちゅーされてる?

なんで?







むにゅん

やっぱりまだ
赤ちゃん
ちんちんだね♡

むにゅ

あぁ

筋弛緩剤が
効いてるから
勃起はしない、か…♣

やめっ

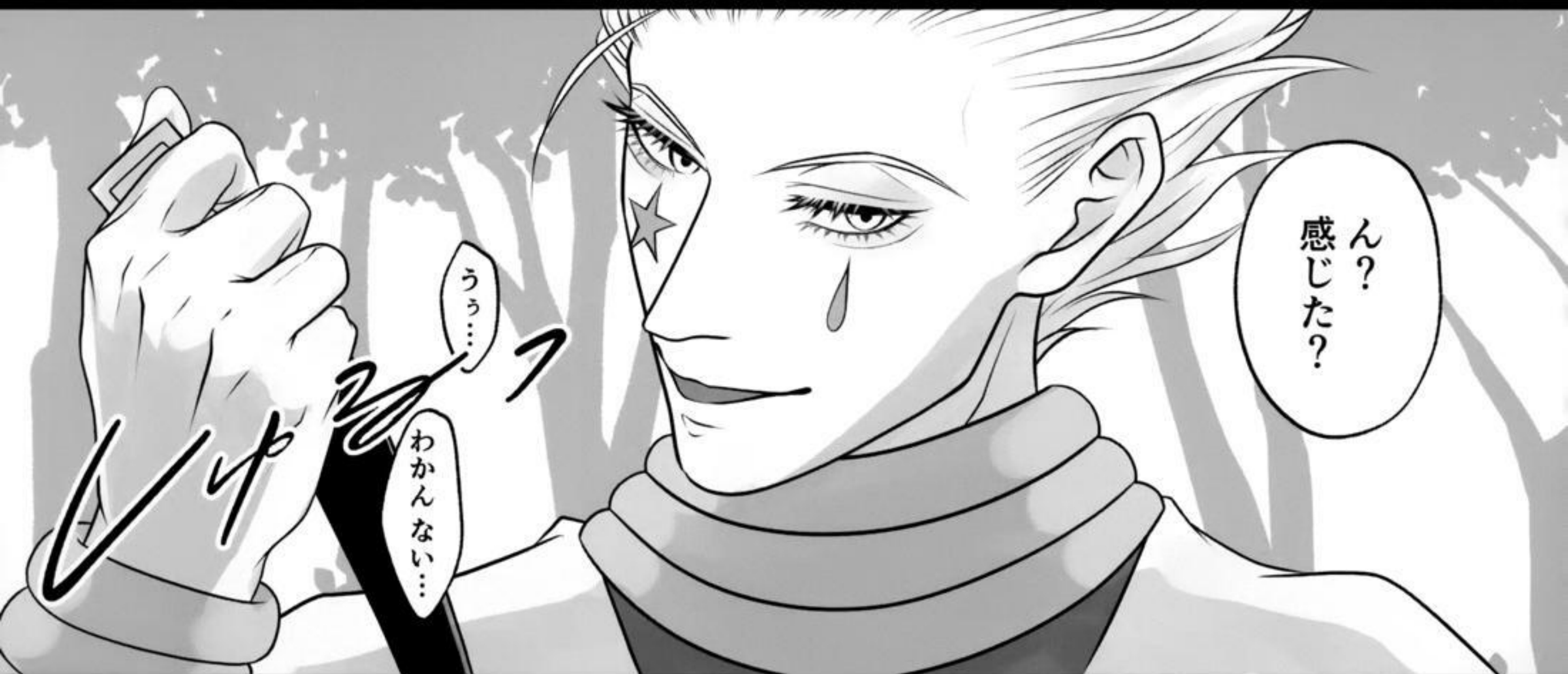
やめろ!!

痛い

体も口も
上手く動かない

ドサッ









ああ

薬のせいで
イッても
射精しないのか♣



勃起も
射精もせずに
イクなんて

女の子
みたいだね
ゴン♥

せっかく筋肉が
柔らかく
なってるんだから

おしりの弄り方も
教えてあげる◆



まずは
手を洗って♣



ゴムは
持ってるから
安心してね♡



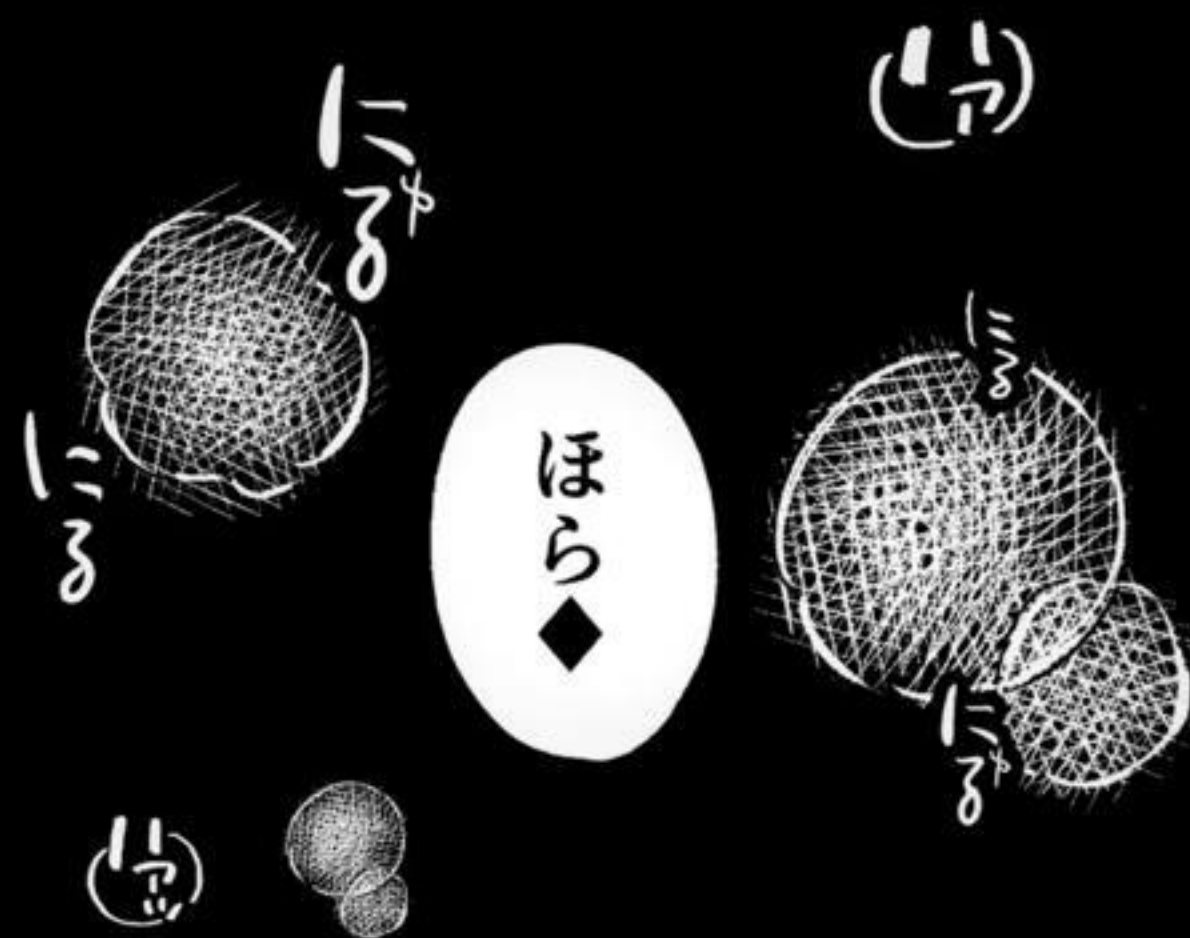
さっき舐めて
ベトベトになった
おしりの穴を
優しくマッサージ♡



なにをするの…？



ん？
いつものオナニーより
気持ちよくなる方法を
教えてあげるだけだよ♡



それと同時に
おしりにゆっくり
指を入れて◆

慣れるまで
浅いところを
こするんだよ♣

んんっ！

今日は薬が効いてて
おしりの穴も
ゆるゆるだから

前立腺の裏まで
入れちゃおうね♥

おしり

ムズムズ
するう…

一人でやる時は
ローションをつけて
するといい◆

にゅにゅにゅ

くるくる



このコリコリ
しているところを
刺激すると

あっ

んあぁ

気持ちよく
なれるんだよ♡



さあ◆

そろそろボクも
我慢の限界♥

ちよつとだけ
入れてみても
いいかな？

いいよね？



ねえ
ゴン♥



あたま

ぽーっとする

オレ
なにしてたんだっけ

ヒソカが
なんか
言ってるけど

でも
入れちゃお♡

ぬふっ
よく
わかんない

ああ

やっぱり
小さい…◆

ぬちや

ゴンの中
すごく気持ちいい……♡

ああ♡

薬が効いて
なかったら
もっとたくさん
締め付けて
くれたんだろうなあ◆

次にエッチ
する時まで

ちゃんとおしりを
拡げてきてね
ゴン♣

だっ♡

すぐ奥まで
いっちゃった♡

めぽ♡

あ♡

あ♡

だっ♡

めぽ♡

ヒソカ……

めぽ♡

めぽ♡

めぽ♡

だっ♡

苦しい……

めぽ♡

前からもたくさん
突いてあげるね♡

ゴンもたくさん
気持ちよくなって♡

ごめんね
ゴン◆

でもゴンが
誘ったんだから
ボクが満足するまで
やめてあげない♡

キミが美味しく
熟したら

ボクたち
もっともっと
気持ちよくなれるよ♡



嵐みたい
に揺さぶられて

ああー♡

イクっ♡

もうなんにも
わかんない……!

興奮しっぱなし
だったから
すぐイッちゃうよ♡

出すよ♡

ほちゅっ

ゴンの中に
中出しする♡

ほんっ

ん女!!



ボクの顔に
一発ぶち込む
ことができれば

その
ナンバープレート
を受け取ろう◆

それまでは
キミに預ける♣

じゃあね♠



発行…まんまご猫布団/まま

発行日…2023.09.16

pixiv…62577912

Twitter_X…mam44_hxh

mail…mamo_hxh@yahoo.co.jp

印刷…大阪印刷株式会社 様

はじめまして、まもです
10年振りの方は久しぶりです
ハンターオンリーに帰ってきたぞ〜！！
結局H×Hが好きすぎて帰ってきてしまいました
今後は年一冊のペースでCP本を出せたらいいなと思っています
以前は自分の出来なさ加減に絶望してたりしたので、
今後は自分のペースでゆっくりやっていこうと思います
遅筆ですが気長にお付き合いいただければ幸いです



そんなわけで初めてのヒソゴン本です
まずは一発やらせよう派なのでR18でお送り致しました
次の本もR18です！えろはいいぞ！！
今回はハンター試験なので、次は天空闘技場予定です
天空闘技場でお付き合いが始まると思うんで、
2度目のエッチにはラブラブになってる予定！
なってくれ！！頼む！！！！



今回の本ももっとソフトな内容の予定だったんですけど
プロット描いてたらどんどん変態奇術師が暴走してきて
男性向けエロ本並に♥まみれの本になっちゃいました…
おかしいな？

だって筋弛緩薬の効いたとろとろゴンちゃんを目の前にして
あの奇術師が我慢できると思わなかったんですよ〜

この本を出すにあたって筋弛緩薬について調べたんですよ〜
そしたら殺人事件とか医療ミスとか出てきて、こっわ！って思いました
感覚はあるのに伝えられないまま手術されたりとか
怖すぎませんかショック死するわ

それでチラッとお勉強したニワカ知識によって今回は
筋肉が機能しなくなって体も口も動かせなくなる、
勃起も射精もできない、
でも感覚はあるって設定で描きました



医療用だと肺も心臓も動かなくなったりするのもあるみたいなんですけど
原作でもそんなことはないっぽいのでおそらく薄めのやつなんだろうね

でもきっとおしりの筋肉はゆるゆるになってるよね！と思ったら、
私の中の奇術師が、入れちゃお♥っしてきて挿入までいたってしまいました！
本当はアナニー教えてあげるだけのつもりだったんです！
ホントなんです！！！！！！

なんにしてもちゃんと本が出せたのでよかったです！
この世界線のヒソゴンはまだラブラブになる途中なので
今後に期待してください！私はハピエン厨なので
ハッピーエンドにしかならないぞ！！
やっぱりヒソゴンは最高だな！！！！！！
来年はラブラブエッチ本が出したーい！！！！！！



ページの都合もあり長文あとがき失礼しました
次のページからは友達に頼んで書いてもらったヒソゴン小説です！
ぜひ読んでね！

電気羊は夢を見るか？

作：新月●

俺のターゲットは「四四番」。

クジでそれを引いた時から、手のひらが熱かった。初めて出会った得体の知らない生物相手に自分がどこまでできるか挑戦したくなった。

森では昼間、釣竿を振る練習をし、暗くなったらイメージトレーニングを行っていた。

これまでの狩りと同じように。獲物がどういう習性で、何を好み、どんな行動をするのか予想するのだ。まずは姿形。身長は自分より高くキリコよりは低い。しなりのある姿勢に引き締まった筋肉。風に流れる後ろに撫でつけられた髪。奇術師のようなメイクと洋服。セリフや行動を思い出す。彼がどんな思想を持ち、何を考え、何を表現するのか。その全てを想像する。すると自分の中に獲物が「生きて」存在してくるのだ。「生きた」獲物に向かつて、攻撃をする。途端に襲うのはリアルに感じる嫌な波。空気の波か、感情の波か。さざめいてひとときも安まらない恐怖。何度も何度も味わい。寝ることすら難しい。それでもイメージする。イメージする。イメージする。

「ヒソカってさ、意外と普通だよな」

「おはよう、ゴン、いきなり何？●」

頭と体との境界線が無いかの如く、思いついた言葉が口から飛び出す。考えなしというわけでは無い。言語化できた時にはすでに口から出ているのだ。

「俺、思いついちやったんだ」

大きめの白いシャツを着た自分、

同じブランドのシャツを着るヒソカ。

これは夢だ。

獲物を自分の中で「生きている」状態にしているとたまに起こる。寝ていてもオートモードで獲物と自分とのやりとりを繰り返してくれる。

でも変だな。いつもは獲物を狩るシチュエーションしか夢に見ないのに。

今回はどこか都会の家の中。暖かな日差しが入る休日の朝の夢だ。

「ヒソカって、闘いが好きでしょ？ でもそれが九九九九九九を頭の中に占めてるってだけで、残った〇・〇〇〇〇一は普通の人と同じだよなーって」

ヒソカが飲んでいるコーヒーには牛乳が入っている。自分は牛乳のみを透明で背の高いグラスに並々注いだ。この家のどこになにがあるかわかっている。不思議な夢だ。自分はここでヒソカと暮らしているとどうだろうか。

「計算、合ってないけど●」

へえ、意外な一面を見つけた。どうやら彼は「普通」と言われるのが案外、お気に召さないようだ。

自然とニヤニヤしてしまう。

テーブルに向かい合って座ると身長差から視線は上目。

「だって、普通にコーヒーにミルクたっぷり入れるのが好きだし、普通に歯磨きは念入りだし、普通に整髪剤は香りで選ぶし、」

指折り生態を挙げて、「あなたは一般人とこんなに

共通点がありますよ」とでもいうように「普通」を強調してみる。いや、待て、俺はなぜそんなことを知っている？ いや、予想しているのか、俺の脳が？

「それに普通に」

言ってる合間にいつのまにか背後に回られた長身の彼にぐつと抱きしめられていた。ヒヤッとも、ゾッともしない、この感覚。むしろ、暖かい。

「まだあるのかい？●」

耳元で囁かれる。身体には生命が脅かされた記憶が残っているはずなのに。この夢ではどうして、ここまですで穏やかに感じられるんだろう。どうして俺は嬉しそうに笑っているんだろう。

後ろから添えられた腕に自分の手のひらを重ねて、現実の俺がびっくりして思わず起きてしまいそう。な一言を放った。

「普通に、恋人の俺のことが大好き」

どうやらここでは、俺とヒソカは一人で暮らしている、さらに、その……、「恋愛感情を伴ったお付き合い」をしているらしい。信じられない。だって、ヒソカは俺のこと、そんな目で見てたっけ？

そんな意識などお構いなしに二人の甘い休日には繰り広げられていく。その様子を外から、中から見つめていると、どちらが現実の意識でどちらが夢なのか段々と曖昧になってくる。

ひとしきり朝のテレビと会話を楽しんだら、昼過ぎから大通りのカフェへ。朝昼かねてだからか、甘いパンケーキも、何重の高さのハンバーガーも、チーズソ

ースのかかったポテトも、たつぷり頬張る自分と、筋肉を育てるためか高タンパク低カロリーなヒソカの食事。俺の口端の食べカスをすくい取ってくれるヒソカは本当に愛おしそうに微笑んでいる。先に食べ終わった後、ヒソカは不意に來た端末のメッセージに夢中になるから、こっそりすねた表情をしてみたら、すぐにこつちに気付いたみたいだ。細い目を更に細めてにっこりしてくる。頬を大きな手で包み込まれ撫でられた。

食後にバスケットコート横を通った時に、ハンター試験中にあったネテロ会長とのボール遊びの話をした。するとヒソカはどこからかバスケットボールを調達してきた。彼は同じ遊びをしよう、と提案する。もちろん俺は快諾だ。わくわくで震えがきた。奥歯が少し音を立てた。

満足いくまで遊んだらそろそろ日も傾いてきている。夕飯と明日の朝の買い物をしに、スーパーに寄って、またこの部屋に戻ってきた。

夕飯前に汗を流そうとするとヒソカがひよい、と俺を抱える。

「いつしよにシャワーを浴びないか？ ゴン◆」

「えー、こここのところ毎日じゃない？」

疲れていたとはいえずるりと抱えられたことがほんの少し悔しかったから、憎まれ口を叩いてみる。そんな口をそつと以外と柔らかい唇でふさがれた。

「いやじゃないでしょ♥」

「……………まーね」

目の前にその男性の顔立ちがあることが慣れなくて、つい目を背けてしまった。

「…………ふう、はっ」

そしてこれも毎日なのだが、一緒にシャワーをあびると必ずと言っていいほどすみずみまでチェックされる。その指で、その舌で、その瞳で。

「うん、今日もみずみずしいね〜ゴン♥」

そろそろ、ヒソカの語尾が全部「♥」になる。

俺は湯気と恥ずかしさと快感でぼんやりしてきた頭の中で考えた。

ヒソカは今日の浴室では俺の胸の辺りを集中的に攻めると決めたらしい。

「…………つ、もう、いいでしょ、ヒソ、っカ」

長くて細い指と少し伸びた爪が胸の突起を悩ましげに弄る。時にゆっくりじわじわつまみ、時に素早く弾き上げる。だんだん敏感になるソレはヒソカの指紋の凸凹でさえ感じ始める。

指先が触れることさえ、凶器だ。

「いいわけないだろ、ゴン♥」

俺が立っていることももうキツくて、押し除けようとするとヒソカはさらに身体を寄せてくる。

「気付いてるかい？」

「なにっ」

「今日はまだ、指でしか触ってないんだけど♥」

「っ!?!」

うそだ、あれ、こんなに気持ちいいのに？ 指だけ

だっけ？

「舐めたらどうなっちゃうのかな？♥」

「…………やあ、め」

ばたついて逃げようとしたらヒソカの方が速かった。

向き合った状態で背中手回され、持ち上げられた。胸を自分の顔の前に。こんなの、逃げられない。戸惑うことしか出来ずに下方になった彼の顔を見ると、舌を出しながら上目遣いをしてきた。

いやらしく妖艶で、美しい。

「や、やだ……」

期待で胸がドキドキしている。鼓動の揺れですら両乳首が揺れて感じるくらいに神経が集中する。

「もつと、こつち見て〜らん♥」

自分の弱いココを僕に食べられるところを。

舌がミリで近づくのもスローモーションに感じられたかと思うと同時に、一気に距離を詰められ、呆気なくヒソカの舌で転がされたら、頭の中で火花が散った。

ヒソカは付き合うようになってから、俺のためにご飯を作ってくれる。

それもすごく美味しい。お風呂から出てすぐに俺はソファにダイブしたけど、彼はキッチンに立つ。

前にいつから料理を始めたのかと聞いてみたけど「奇術師に不可能はないからね◆」とはぐらかされた。

いまでは彼のつくる料理が俺の好物だ。

オリジナルブレンドのスパイスで味付けされたス

ペアリブ、乾煎りされたナッツの乗ったグリーンサラダ、茹でた豆をつぶしたポタージュ、辛さ控えて柔らかめのペロンチーノ、などなど。

粒のままの黒胡椒を普通はミルで削るんだろうけど、彼は指先だけで粉々にする。

まるで魔法のように(奇術の方が良いんだっけ?)彼の手からするする生み出される涎の出る料理たちに俺は夢中だ。

お風呂上がりだからか、髪の毛は固めずにヘアバンドで前髪をかき上げている。

そんなラフな姿を見られるのは自分だけなのかと優越感に浸りながら見つめていたら、ディナーが完成したらしい。

今日も手伝わずに完成してしまった。

まあ、申し出ても断られるが。

「おまたせ、待ちくたびれてないかい? ♣」

「ううん、いつもありがと!」

「いいよ、君に見つめられて作るのも悪くないからね、ふふ ♡」

そのゾクゾクと変態感を溢れさせる物言いは慣れないけど。

「ヒソカってこの家だとお酒飲んだりしないよね」

本当は食べながらだから、もがもがとして、こんなにはつきり発音してないけど。ヒソカにはばっちり意味がわかるらしい。

「そうだね、仕事で飲むことはあるけど、別に好きでは飲まないね ♣」

「前の潜入の時には、お酒と料理のマリアージュだったけ? それに対して語ってたのに」

「あのパーティーの時か。そんな話題が好きそうなターゲットだったからね ♣」

「博識でちよつと、かつこよかったけどねー」

「……」

ヒソカが棚をゴソゴソ探し始めた。

戻ってきた手に持ってきたのは茶色くて丸っこい瓶。

「なにソレ?」

「ウイスキーだよ、以前、知り合いにもらったのを忘れてて ♣」

「へー」

興味津々にキラキラと揺れる液体の入る瓶をのぞいてみた。中身は半分ほど減っている。

「食後にストレートでシガーと一杯、てのが定番だけど、今日みたいな日には、炭酸水と割って爽やかに飲むのも美味しいんだ、飲んでみる? ♣」

「ええ、俺はいいよー」

「結構、甘い香りだよ、ゴンなら栓を開けなくてもわかるだろ? ♣」

確かに、ヒソカが棚から出してきた時からそのアルコールは感じていた。香りは煙ったい中に、つつじの蜜に似た甘い香りも混ざっている。

でもなあ、俺、お酒は感覚が鈍るような鋭くなるような変な感じが慣れないから、まだ好きじゃない気がする。

悩んでいると、ヒソカは自分の分を注いだ細長いグ

ラスを持ってきていた。透明なガラスに、形の揃っていない氷、薄い琥珀色と、炭酸の泡が下から踊る。くるとマドラーでかき混ぜると一瞬、泡立ちが強くなった。

彼はそれを軽く口に含めると、グラスを灯りにかざす。色合い、香り、舌触り、全てを楽しんでいるのだろう。

どうしようもない大人の色気を感じた。

見惚れていることに絶対気付かれてるとは分かっているながらも視線を外すことができない。

彼はそのまま、にやりと笑うと、琥珀色のお酒を一口含んでキスをしてきた。

むせかえる慣れないアルコールに俺は正常な判断力をその手に握っているのか、はたまたすでに狂気を握っているのか分からなくなっていた。

食後にカラーチョコスプレーのかかったバニラアイスが出てきたことは覚えていた。

ヒソカは食事中でもデザート中にもキスをしてきて、その全てでアルコールを摂取させられた。

とろんとした瞳を彼に向けたのが最後、リビングの片付けもせずに寝室に連行されてしまった。

食べきっていなかったんだろう、バニラアイスはサイドテーブルに置かれている。

アイスとけちゃう、とぼんやり少し脳が動いた。

前にもお酒は飲んだことがあるけど、俺は量を飲むと寝てしまうようだ。ぼんやりするような夢のような心地の直前、眠りを死とするなら死ねないギリギリで

生かされているようなものだ。ヒソカにとつてはそれは得意分野。きつと容易だったに違いない。

「服、ぬがすよ♣」

身体はくっつきとしてゐるから、衣服はするすると肌を滑っていく。シーツの上にはなにも纏つてない俺と、ガウンだけをまとつたヒソカの二人だけ。

すると彼は小さな銀色のスプーンでバニラアイスを掬って食べさせてきた。

「んっ」

冷たい感触が口内に広がり心地いい。遅れて甘さも広がる。鼻に抜けるいい香り。

すつと引き抜かれるスプーンも名残惜しくて、つい舌で追ってしまった。

その舌をもう口内には帰さないというように、彼の舌に絡め取られる。息もしづらいいし、顎にかけてバニラ色に濁った線が引かれる。彼の右手は俺の性器をゆつくりじつとりとなぶる。

「や……」

口が一瞬離れたかと思うとバチつとぶつかる視線。こつちを見る視線。

ああ、これ、

恥ずかしいんだ。

彼の右手はどんどん早くなるのに、視線だけは俺の顔を、顔だけをじつと見つめてくるんだ。

どう指がなぞつたら、眉がどう動くか、

どう爪を立てたら、唇がどう開くか、

どう間接を曲げたら、喉がどう震えるか、

どう速度を変えたら、瞳がどう濡れるか、

全て、全て観察されている。

会話のリソースも観察に費やされて、一言も発しない。

「やあ……、あ、うん……」

本当にやめてほしい！ この変態！

恥ずかしさと気持ちよさが加速度的に上がってきたら絶頂はすぐだった。

「♥」

彼は長い指に絡む白濁を見せつけるように舐める。

ふいつと顔を背けるとぎゅつと抱きしめられる。

「気持ち、よかったかい？♥」

耳元で囁かれると嘘はつけない。

「……うん」

また一口、アイスを食べさせられた。もう半分溶けてる。

「自分でほぐしてみる？♣」

首筋へのキスの嵐を受けていると変な提案をされた。

「え！……、なにそれ」

「見ててあげるからさ♥」

正直、見られるのはもう今日は嫌だ。

『普通』のボクにされるよりいいかもよ？◆」

……うそ、うそだ、それ気にしてたの？！ 朝から！！

思わず笑ってしまった。

「ふっ、あはは」

「何、そんなに笑って♥」

「ごめん、ごめん！ ふふっ、朝のはそういう意味じゃないよ」

俺は自分からヒソカの筋ばった首をするりと撫でながら、固い背中に腕を回して抱きつく。

「こんなヒソカを『普通』だなんて言えるのは俺だけだから、その発見が嬉しかったんだよ」

正直に正直にまっすぐ愛している人に伝えた。

「……♥」

お返しはたつぷりの愛で返ってきた。

「いれるね♥」

結局、ほぐしたのは彼の指と舌。

「うん……」

受け入れる際は今でも少しだけ緊張する。

するとなぜかもう液体になりかけのバニラアイスを口に運ばれた。

なんで？ と思いながら、口内に広がる甘さに少し緊張がほどける。

ほっとしたその瞬間に彼のモノが一気に入ってきた。

「！ ひゃん！」

思わず口から声が飛び出る。

一気に入ったそれは奥でゆつくり行ったり来たり

して、俺の中をあばき続ける。

アルコールでぼんやりしているからか、アイスの甘

さ効果か、いつもより痛みは少なくて、すぐにジンジンする気持ちよさが登ってくる。

「ふ、……え？」

またアイスを流し込まれる。

「ゴン、可愛いよ♥」

そして、恋人からの愛の言葉。

腰を動かされるたびに揺れる視界と脳。

舌の上の甘さ。

バナラの味と香りすら、気持ち良い。

え、気持ち良い？ 味と香りが……？

やばい、なんだこれは。味覚と快楽を繋げることができるなんて知らない。

これじゃ、バナラアイスを食べるたびに思い出してしまう。

彼の胸板、彼の髪、彼の匂い、彼の感触、彼の言葉、彼の瞳。

それにより熱くなる脳と身体。

絶対、わかっててやってるんだ。

アルコールで境目を分からなくさせて、バナラアイスの強烈な甘みと、快楽を与えて。

俺の視覚も聴覚も味覚さえも操ってくるんだ。

そんな支配された状態を、ほんの少し嬉しいと思うのをスミに追いやって、俺は悔しいと思うことにした。

「もう、わかんないって、くらい、きもち、いい」

突かれるたびに声が途切れる。

「うん、わからなくなってる良いよ♥」

こつちがこんなに必死なのに、向こうは汗もかかない。前髪が動きに合わせて揺れ、合間から覗く瞳もカッコーいいなあ、なんて改めて思いながら、そろそろ意識が限界そう。

「あ、いきそうだね、ゴン♥いったら寝ちゃうかな？」
うん、多分、そう。

「じゃ、ラストにもっと気持ち良くしてあげるね♥」

まだこの上があるの？ もう俺、限界そうなんだけど。

突き上げられる角度を変えられ、

「っ！」

片手はだらだら先走る俺の先端を捉え、

「あ、ああ！」

もう片手で胸の突起を捻じられ、

「ん！」

その口で口を塞がれる。

「っ、ん、む……っ」

気持ちいい、これは、無理！

不意に身体に力が入ったと思ったら、何かが弾けて、全身から力が抜けた。

「起きたら、続きをしようね、ゴン♥」

俺から抜いたヒソカが、頭を撫でてくれる。

うん、起きたら、起きたら、続きを——。

好きだよ、ヒソカ……。

「っ!!」

日差しを感じ、幸せな気持ちで目覚めたら、目の前に広がる森の緑。隣を探してももちろん、誰もいない。

「え、あれ……」

そうか、これが現実だ。

俺はハンターになるために、試験を受けにきて、そして、今は四次試験の最中、狩る対象は、四四番、ヒソカ。

「なんであんな夢みたんだろう……」

夢があまりにも現実的だったし、感覚をあまりにも

むぎむぎ思い出せる。

「……」

思い出して赤面した。

「ヒソカのこと、考えすぎて、へんになっちゃったのかな……」

嫌でもフラッシュバックしてくるその記憶を、どうにか押しやって、寝床から出た。

油断は出来ない、ここは敵ばかりの森の中。

「集中しなきゃ」

そうして釣竿を振り始める。

彼は知らない。その夢が、夢ではなく、今後、自分が体験するであろう未来を垣間見ていたことなど。

そして、それが遠い未来ではないということ。

彼はまだ知らない。

Fin.

あとがき：新月

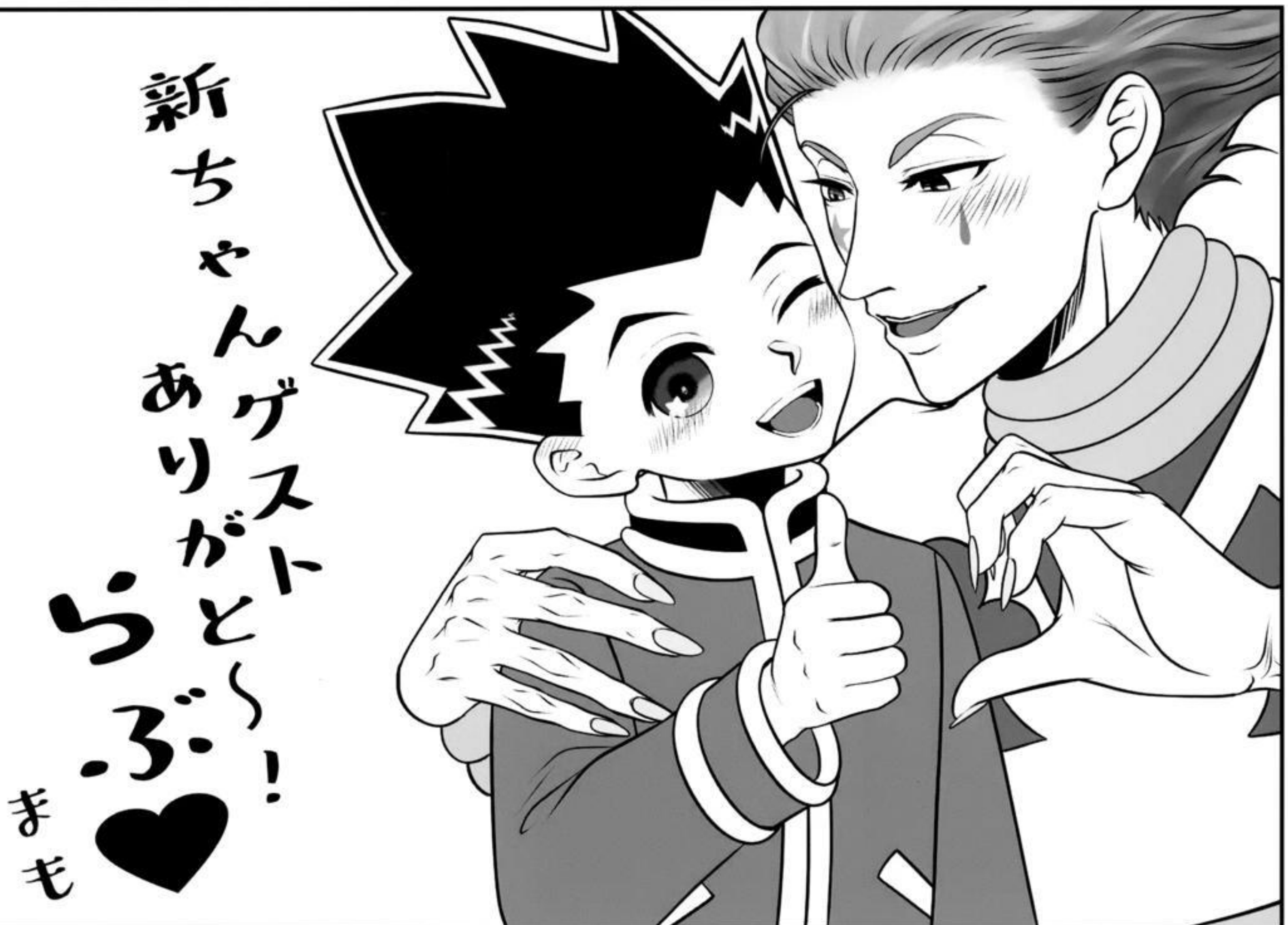
お読み頂きありがとうございます。
まもちゃん、お声がけ頂きありがとうございました！
まさか一緒に本に載れるとは嬉しく思います！

ゴンちゃんについては終始、可愛らしく、
ヒソカについては終始、この変態が...と思いながら書き上げました。
ヒソカもゴンも好奇心が旺盛だし体力もあるので
色々なプレイを楽しんでそうですよね。

まもちゃんとは住んでいる距離が物理的に離れていることもあって、
基本的にはLINEで話すのですが、
ヒソカの過去編を捏造したりとかしてます。
親殺してて欲しい、とか
裕福なぼっちゃん育ちっぽい、とか
栄養管理まで完璧にしてくる親の目めすんで食べた安いお菓子が
すごく美味しく感じて大好きになったのでは、とか。

白シャツ半ズボンのソックスガーターヒソカは
まもちゃんがいつか描いてくれるのではないのでしょうか、ええ。期待してます。

それではまた次の機会を楽しみにしてます！
ありがとうございました♪





HYSKOR x GON
9.16.2023 MAMO

ויהיה לך ויזרע לך